

文化講座「特殊研究講座」一覧

平成 20 年度

10 月 1 日（水）「子どもの科学する心を育てる」 帝京大学教授 福岡 敏行氏

平成 21 年度

10 月 31 日（土）「大学生に向けての『いのち』の授業」

NPO いのちをバトンタッチする会代表 鈴木 中人氏

人間社会学部研究会（平成 20 年度）要旨（初等教育学科関連）

平成 20 年 7 月 9 日

小学生の体格・体力及びバランス能力

准教授 富 本 靖

最近、全国の学校や幼稚園あるいは保育施設などで、転んでも手が出ずに直接顔を打ち付けて怪我をした、あるいはボールを投げたり取ったりしただけで骨折をした、子どもたちが真っ直ぐに走ることができないというような事例が目立つようになってきた。附属の初等部でもいくつもの怪我の事例が報告されている。平成 10 年度から 12 年度までを年間件数でみると、23 件、28 件、25 件と 20 件台であったが、13 年度から 15 年度は、36 件、36 件、33 件と 30 件台に増えているのだ。この結果をみて、骨が弱くなってきているとか、運動機能が劣ってきているとか、身体バランスが悪くなってきているなどとは一概には言えないが、怪我の件数が多くなってきていることは事実である。

そこで私はまず児童の体形の変化に着目した。体形の変化に伴い、成長期の小学生は立位時の重心にも何らかの影響を及ぼしているのではないかと私はここに着目し、初等部の児童 1 年生から 6 年生までのそれぞれ 100 名（計 600 名）の立位時の重心を計測し、立位バランス能力についての解析を行うことを目的とした。

測定には、野田式静電容量センサー重心計測装置を用いて重心位置及び身体動揺を計測した。児童の踵をセンサーボード A 点で接触するようにして、つま先を適度に（50～60 度）開いてセンサーボードに直立に立つ姿勢をとる。そして、踵からつま先までの前後方向を 0% から 100% とし、踵から小指までの左右方向を 0% から 100% とする。計測はサンプリングタイム 0.5 秒で 64 回（32 秒）の計測を行い、重心位置、重心位置の標準偏差（身体動揺）をそれぞれの児童において計算した。

前後のバランス能力をみると、1 年生は全体的に $\pm 20\%$ 以内に納まっているが、よく見ると + の値に多く集中していることが分かる。多くの児童は右が利き足であり、+ 側に数値が高いということは直立姿勢状態では、右足側に重心を置き立っていることがわかる。

それに比べて、2年生、3年生は基本的には±20%以内に納まりを見せている。4年生は左右10%以内に一番集中していて安定している。5年生、6年生になると再び全体的に広がりを見せている。

左右のバランス能力をみると、学年が上がるにつれて、重心位置の標準偏差が小さくなっていく傾向がみられた。このことは、学年が上がっていくにしたがって重心位置の左右どちらかへの傾きを持つ児童が減ってくることを示している。

今回の研究では、成長途中の児童であったため、数値のばらつきはあったが、年齢が上がるにつれて重心が中央に安定していく傾向がみられた。これらの結果を踏まえて小学校体育のあり方の指標にもなると考える。

平成21年1月9日

擬プルタルコス『子どもの教育について』の教育観

准教授 鈴木 円

擬プルタルコスの『子どもの教育について』は、古代ギリシアの教育論として唯一のまとまった著作である。長くプルタルコスの作品とされ、『倫理論集』におさめられてきた。現在では真作ではないとされ、プルタルコスの弟子か親族が彼の残したメモや下書きを整理してまとめたものと推定されている。

プルタルコスの著作には、本作品に限らず、古代ギリシアのパイデアの思想を伝えるものが多く、ルネサンス期から18世紀にかけての多くの文人、エラスムスやメランヒトン、モンテーニュ、ルソーやペスタロッチーらに影響を与えてきた。特に、エラスムスは『子どもの教育について』から直接に影響を受け、児童教育論を著している。

『子どもの教育について』は20節に分かれている。子どもが徳を身につけ、正しい行いをするまじめな性格を備えた者となるために必要なことが示される。子どもの生まれの大切さから説き起こし、素質（ピュシス）と理〈学び〉（ロゴス）と習慣〈訓練〉（エトス）の重要性を説く。そして、幼児期に母親が養育することの大切さ、少年期の養育係の選び方、望ましい教育の内容、叱責と賞賛の在り方、特に青年期の子どもに対する父親の対処の仕方など、具体的な教育の勧めが多方面にわたって展開される。

本発表では、『子どもの教育について』に関して、以下の三つの点から考察した。

最初に、標題の「教育」という言葉が、古代ギリシアで一般的に教育を指す時に使われるトロペーやパイデアーではなく、アゴーゲーであることの意味を考察した。このアゴーゲーという言葉はスパルタにおける組織的公教育を指す言葉でもあり、この言葉を敢えて使っていることから、スパルタの教育観を作者が念頭に置いていると推定される。本文を読む限りその影響は限定的であるが、さらにスパルタ教育との思想的関連性について考察する必要がある。

次に「生まれのよさ」の捉え方についてである。本作品は、生まれの良し悪しがその人物の優劣を決めるものではないとするプルタルコスの思想を受けついでいる。しかし、社会的な幸不幸の原因として生まれの良さを捉え、それゆえにこそ正嫡の子をもうけるべき

だとする現実的な面も見せている。

最後に「素質と教育」についてである。素質と教育の関係は、古代ギリシアにおいては重要な論争課題である。貴族的教育観においては素質が重視され、民主的教育観においては教育が重視される。古代ギリシアの文献や断片において素質と教育の関係がどのように考えられているかを考察し、それらとの比較から、本作品が、素質を教育の土台としながらも教育の力により強い信頼を置いていることが明らかとなった。

西欧思想の源となっている古代ギリシアの教育観、その結節点ともいえる本作品の教育観を考察することを通して、民主主義社会の理想として、教育に価値を置く考え方が生ずる過程をわずかながら明らかにすることができたと思う。なお、本発表の資料は、本紀要の〈研究ノート〉として掲載されている。

平成 20 年度 初等教育学科 卒業論文題目一覧

○モンテッソーリ教育の意義と目的に関する考察

ー歴史的背景と保育の目的からの探求ー

秋 山 由 那

○小学校外国語活動の導入に関する可能性と課題

江 口 麻也子

○子どもの遊びのプロセスと心の変化についての一考察

ー幼稚園における自発的活動の場面を通してー

小 倉 由貴子

○子どもの学びにそくした理科授業のデザインに関する研究

酒 井 千 穂

○特別な教育的支援を必要とする児童への対応

酒 井 麻衣子

○「分福茶釜」の研究

坂 井 美 希

○「いのちの大切さ」を感得させる道德教育の具体的展開に関する研究

鈴 木 智 子

○児童期におけるの体育教育の在り方

ー各発達段階と種目の結びつきー

田 中 八重子

○小学校が求めるアフタースクールプログラムの提供方法に関する一考察

長谷場 慶 子

○小学校音楽科の鑑賞教育に関する一考察

平 谷 早

○幼児の造形的発達と描画活動に関する研究

ー幼児の発達段階に視点をあててー

穂 積 幸 子

○仲間を認め合う学級経営のあり方に関する一考察

ー支持的風土を基盤としてー

松 村 枝里子